

## ソーシャル・サポートネットワークにおける 異性の割合と対人葛藤方略との関連

山下 倫実

### 【要 約】

本研究では、ソーシャル・サポートネットワークの多様性の指標の1つとして、ソーシャル・サポートネットワークにおける異性の割合に着目し、対人葛藤方略との関連について検討が行なわれた。また、ソーシャル・サポートネットワークにおける異性の割合と平等的性役割態度との関連についても、探索的に検討された。その結果、道具的サポートネットワークの異性の割合が高い者は、交渉によって両者が受け入れられる形で問題を解決する統合スタイルを採用し、お互いに譲り合うといった妥協スタイルを選択しないことが明らかとなった。このような結果は、情緒的サポートネットワークではなく、道具的サポートネットワークのみで結果が得られた。また、ソーシャル・サポートネットワークの異性の割合と性役割態度との関連が認められたが、その関連は男女で異なる可能性が示唆された。特に、女性においては、伝統主義的な態度をもつ者が平等主義的な態度を持つ者より、サポートネットワーク内の異性の割合が高いという関連が認められ、異性を重要なサポート源とみなしていることが示唆された。

キーワード：ソーシャル・サポートネットワーク、対人葛藤方略、性役割態度

### 【問 題】

人間は人と人との関係の中で生きる社会的な存在である。日々、多くの人に支えられ、生活している一方で、対人関係における問題に悩まされたり、対人関係に起因するストレスを感じることも多い。たとえば、Holmes & Rahe (1967) は、あるライフイベントを経験した者が再適応に費やす労力を得点化した社会的再適応評価尺度を作成したが、その多くは対人関係に起因するものである（配偶者の死亡、家族の健康・行動の大

きな変化、職場の上司とのトラブルなど)。また、大学生を対象とした研究に着目すると、大学生が報告したストレスイベントのうち、人間関係に関する出来事は23.8%を占めていたという(原口ら, 1992)。特に、青年の重要な対人関係の1つは友人関係であり(和田, 2002)、友人関係が心理的健康を保つための重要なサポート源となる一方で、友人関係で生じた問題を解決すべき場面に遭遇する機会も増えると考えられる。そこで本研究では、「対人葛藤 (Kelley, 1987)」場面における対人葛藤方略に着目し、対人葛藤場面において有効に機能するソーシャル・サポートネットワークのあり方について検討する。

ソーシャル・サポートについては様々な定義がなされている。たとえば、Cobb (1976) は、①ケアされ、愛されている、②尊敬され、価値ある存在として認められている、③互いに義務を分かち合うネットワークの一員である、という3つのうち少なくとも1つ以上をその人に信じさせてくれるような情報であると定義した。また、Shumaker & Brownell (1984) は当人同士の認知を重視し、受け手の安寧が意図されていると送り手あるいは受け手によって知覚される、2人以上の間での資源の交換と定義した。しかし、ソーシャル・サポートの定義は循環論となりやすく、多くのソーシャル・サポート研究では、最も重要な変数であるソーシャル・サポートそのものについてアドホック(場当たりの)な操作的定義を行うことしかできなかったという問題点が指摘されている(浦, 1992)。このようにソーシャル・サポートの定義は非常に難しいものであるが、本研究では、ある個人を取り巻く様々な人からの有形・無形の資源の提供(南・稲葉・浦, 1988)という比較的緩やかな定義を採用する。

これまでソーシャル・サポートが抑うつ状態の緩和、心理的満足感、死亡率の低減など個人の心身の健康と関連があることが示唆されてきた(e.g., Cohen & Wills, 1985; Blazer, 1982; Seeman & Syme, 1987; 和田, 1992)。たとえば、大学生を対象として研究を行なった和田(1992)は、ソーシャル・サポートが少ない者と比較して、ソーシャル・サポートが多い者は、抑うつ気分が低く、孤独を感じず、大学生活の不安も少なく、大学満足度も高いことを示している。特に、思春期から青年期においては、友人が親に代わり影響力を持つように変化するため(Sullivan, 1953)、同性友人がソーシャル・サポート源として重要な役割を果たしていることが明らかとなっている(e.g., 嶋, 1992)。しかし一方で、青年のソーシャル・サポートネットワークは同質性が高くなりやすく、様々なストレス状況に対応することを難しくする側面もある(Salazar et al., 2004)。

先行研究において、ソーシャル・サポート源の種類によって提供するサポートの種類が異なることが示唆されており(Campbell, Marsden, & Hurlbert, 1986; Wellman & Wortley, 1989)、年齢、性別、所属(学校や職場の違いなど)、役割(先輩、後輩、先生、上司、部下など)など、背景の異なるソーシャル・サポート源は持っている資源が異なると考えられる。つまり、ソーシャル・サポートネットワークが多様であることは、

様々な興味や関心、新しい価値観や考え、自分とは異なる物事への対処行動などに触れる機会を得ることにつながる可能性が高い。したがって、ソーシャル・サポートネットワークの多様性が低い者と比較して、多様性が高い者は効果的な対処行動を選択できると予測する。本研究では、ソーシャル・サポートネットワークの多様性の1つの指標として、ソーシャル・サポートネットワークに存在する異性の割合を用いる。総務省青少年対策本部（2001）によると、異性の友人について、女子については年齢区分による傾向は認められないものの（30%程度）、男子については小学4～6年生の19.1%から、22～24歳では46.2%まで上昇することが明らかとなっている（柏尾, 2005）。このような友人関係の広がりや、青年のソーシャル・サポートネットワークに変化をもたらすことが予想され、対人関係の問題に対処するためのソーシャル・サポートネットワークのあり方の検討に適切であると考えられるためである。

では、ソーシャル・サポートネットワークにおける異性の割合に影響を与える要因は何だろうか。これまで多くの先行研究において、性役割パーソナリティとソーシャル・サポートの授受との関連が検討されてきた（Burda, Vaux, & Schill, 1984）。しかし、ソーシャル・サポートを求める場合、誰が問題解決のためのソーシャル・サポートを提供することが可能か、誰からソーシャル・サポートを受容すべきかといった他者に対する態度や信念に関わる判断がなされると考える。したがって、性役割パーソナリティといった個人特性ではなく、性役割行動や性役割態度などに着目する必要があると考える。本研究では、平等主義的性役割態度スケール（鈴木, 1994）を測定し、ソーシャル・サポートネットワークのあり方に与える影響について探索的に検討する。

これまで対人関係の問題に対処するための方略については、対人葛藤研究において検討されてきた。対人葛藤とは、個人の行動、感情、思考の過程が他者によって妨害されている状態と定義されている（Kelley, 1987）。また、このような状況において葛藤解決を目的とし、方略行使者が葛藤相手に対して何らかの影響を行使しようとする行動を対人葛藤方略と定義する（加藤, 2003）。Rahim & Bonama (1979) は 方略行使者の関心事を満たす程度を示す自己志向性と、葛藤相手の関心事を満たす程度を示す他者志向性の2次元によって、葛藤方略を以下の5つに分類している。①統合：方略行使者と葛藤相手の両者が受け入れられるように交渉し、問題を解決する方略、②譲歩：葛藤相手の要求や意見に服従する方略、③妥協：方略行使者と葛藤相手の両者が相互に要求や意見を譲歩し合い、お互いに受け入れられる結果を得ようとする方略、④強制：葛藤相手の利益を犠牲にしても、方略行使者の要求や意見を通そうとする方略、⑤回避：直接的な葛藤を避けようとする方略である（加藤, 2003）。対人葛藤方略に関する先行研究においては、双方向の意見や立場を尊重するような建設的な方略が有効であることが明らかになっており（e.g., Canary, Cupach, & Messman, 1995）、統合方略が最も効果的な葛藤方略であると考えられる。したがって、ソーシャル・サポートネットワークの多様性が

低い者より、高い者の方が対人葛藤を最も効果的に解決する統合スタイルの葛藤方略を行使すると考えられる。

最後に、どのような種類のソーシャル・サポートが適切な対人関係葛藤方略の行使を促すのであろうか。これまでソーシャル・サポートの種類については研究者によって様々な分類がなされてきたが、概ね2種類に大別されることが明らかとなっている。具体的には、個人の心理的な不快感を軽減したり、自尊心の維持・回復を促すような機能を提供する情緒的サポートと、個人が直面している問題そのものを直接的・間接的に解決するための機能を提供する道具的サポートである（橋本, 2005）。対人関係に生じた問題に取り組む際に、自分自身の不安を和らげ、悩みを聞いてくれるといったサポートは効果的である。しかし、対人葛藤方略の行使において、ソーシャル・サポートネットワークの多様性は不安の軽減への影響よりも、自分自身の考えとは異なる意見の受容や、相手の立場の理解への影響の方が大きいと考えられる。したがって、対人葛藤方略の行使においては、情緒的サポートネットワークではなく、道具的サポートネットワークの多様性の効果が認められるだろう。

### 予測

1. ソーシャル・サポートネットワークにおける異性の割合が多い者が少ない者より、葛藤を最も効果的に解決する「統合スタイル」の葛藤方略を用いるだろう
2. ソーシャル・サポートネットワークにおける異性の割合が影響力を持つのは、情緒的サポートネットワークではなく、道具的サポートネットワークであろう

### 【方 法】

**調査協力者** 大学生164名（男性85名、女性79名）を対象とした。平均年齢20.3歳（レンジ19歳～24歳）であった。そのうち、過去3年以内に失恋経験のない67名（男性36名、女性31名）が対人葛藤方略尺度に回答した。

**手続き** 講義時間内に質問紙を配布し、「親密な対人関係」に関する研究の一環として、調査への参加を依頼した。ソーシャル・サポート尺度への回答方法が難しかったため、その部分については回答方法を説明しながら、講義室内で回答してもらった。残りの質問項目についてはプライベートな質問項目が含まれているため、自宅にて回答し、封筒に封をしたうえで、1週間後の講義時間に提出するよう教示した。

**質問紙構成** 質問紙は表紙と以下に示す尺度によって構成された。表紙には、研究の目的と回答にあたっての注意点を記載した。初めに、プライベートなことについて尋ねる質問項目があるが、個人が特定できる形式で研究結果が公表されないことを明記した。

### 1) ソーシャル・サポートに関する尺度

人間関係について「会う回数とは関係なく、あなたが身近に感じる人との関係」と定義した。なお、該当する人物がいない場合は、無理に挙げなくてもよいことについて表記した。

#### ① 情緒的サポートネットワークの測定

「あなたに共感してくれることやあなたを信頼してくれることが多く、あなたを大切に思ってくれる人は誰ですか」という項目について、ソーシャル・サポートを受けている人のイニシャルを挙げてもらった（最高10人まで）。次に、性別及び関係性（友人/家族/恋人など）について回答を求めた。

#### ② 道具的サポートネットワークの測定

「あなたが個人的な問題や、人間関係、所属する集団における社会的な問題などに対処するために、必要な情報や知識を与えてくれる人は誰ですか」という項目について、ソーシャル・サポートを受けている人のイニシャルを挙げてもらった（最高10人まで）。次に、性別及び関係性（友人/家族/恋人など）について回答を求めた。

### 2) 対人葛藤方略に関する尺度（APPENDIX参照）

「あなたと友人の意見が対立した状況を1つ思い浮かべてください。」と教示し、対人葛藤方略尺度（加藤, 2003）20項目について4件法で回答を求めた。項目については、「お互いに満足するような結論を見つけ出そうとする（統合）」、「対立を防ごうとする（回避）」、「自分の意見を通そうとする（強制）」、「友人の要求に従う（譲歩）」、「お互いの意見の間を取ろうとする（妥協）」などがあった。

### 3) 性役割態度に関する尺度

平等主義的態度尺度（鈴木, 1994）15項目について5件法で回答を求めた。項目については、「女性のいる場所は家庭であり、男性のいるべき場所は職場である」、「家事は男女の共同作業となるべきである（逆転項目）」などがあった。高得点であるほど伝統主義的な態度を持つことを示す。

### 4) フェイスシート 年齢、性別などについて尋ねた。

## 【結果】

#### 1) ソーシャル・サポートネットワークと対人葛藤方略との関連

加藤（2003）に基づき、対人関係葛藤方略の5つの下位尺度得点を算出した。信頼性係数については、①統合（ $a=.74$ ）、②譲歩（ $a=.82$ ）、③妥協（ $a=.44$ ）、④強制（ $a$

=.87), ⑤回避 ( $\alpha=.80$ ) であった。概ね高い信頼性が得られたが, 妥協の信頼性のみが低かったため結果の解釈に注意が必要である。また, ソーシャル・サポートネットワーク (情緒的サポート及び道具的サポート) における異性の割合についても算出し, 中央値折半を行なった (情緒的サポート  $Me=30.00$ ; 道具的サポート  $Me=25.00$ )。

まず, ソーシャル・サポートネットワークにおける異性の割合と対人葛藤方略との関連を検討するために, 情緒的サポートネットワーク総数を共変量とした 5 (対人葛藤方略)  $\times$  2 (情緒的サポートネットワーク内の異性割合の高さ)  $\times$  2 (性別) の繰り返しのある 3 要因共分散分析を行なった。その結果, いずれの主効果も交互作用も有意ではなかった。

次に, 道具的サポートネットワーク総数を共変量とした 5 (対人葛藤方略)  $\times$  2 (道具的サポートネットワーク内の異性割合の高さ)  $\times$  2 (性別) の繰り返しのある 3 要因共分散分析を行なった。その結果, 対人葛藤方略  $\times$  道具的サポートネットワーク内の異性割合の高さの交互作用が有意であり ( $F(4,232)=6.63, p < .01$ ), 道具的サポートネットワーク内の異性割合高群 ( $M=3.23$ ) が低群 ( $M=2.89$ ) より, 統合スタイルの対人葛藤方略を用いていた。また, 道具的サポートネットワーク内の異性割合低群 ( $M=2.49$ ) が高群 ( $M=2.13$ ) より, 妥協スタイルの対人葛藤方略を用いていた。

これらの結果は, 仮説 1・2 を支持する結果である。

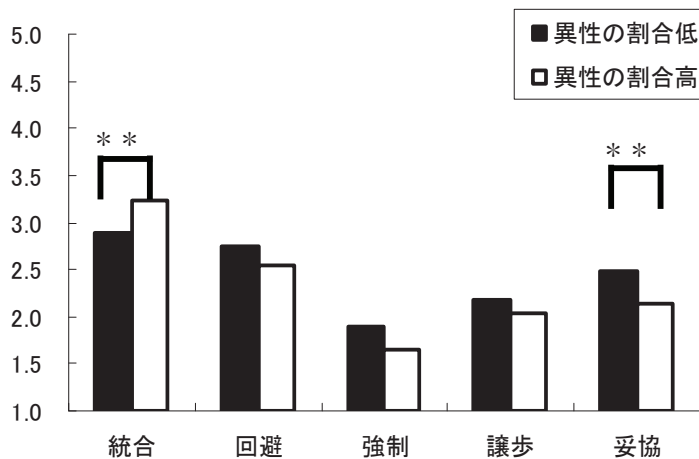


Figure 1 道具的SPネットワーク内の異性の割合と対人葛藤方略

## 2) ソーシャル・サポートネットワークの異性割合と性役割態度との関連

性役割態度とソーシャル・サポートネットワークの異性割合との関連を検討するため, 情緒的サポートネットワーク内の異性割合を従属変数とし, 2 (性別)  $\times$  2 (平等的主義的態度の高さ) の 2 要因分散分析を行なった。

その結果, 性別  $\times$  平等主義的態度の高さの交互作用が有意であり ( $F(1,159)=4.59$ ,



$p < .05$ ), 平等主義的な態度をもつ男性 ( $M=32.69$ ) が平等主義的な態度をもつ女性 ( $M=23.21$ ) より、情緒的サポートネットワーク内の異性の割合が高かった。また、女性において、伝統主義的な態度をもつ者 ( $M=34.05$ ) が平等主義的な態度を持つ者 ( $M=23.21$ ) より、情緒的サポートネットワーク内の異性の割合が高かった。

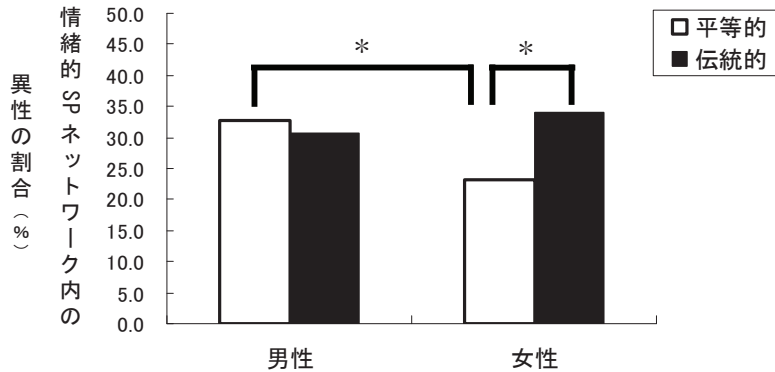


Figure 2 平等主義的態度×性別の交互作用

同様の分析を道具的サポートネットワーク内の異性の割合を従属変数として行なったが、ほぼ同様の結果が得られた ( $F(1,159) = 6.32, p < .05$ )。すなわち、平等主義的な態度をもつ男性 ( $M=29.23$ ) が平等主義的な態度をもつ女性 ( $M=19.33$ ) より、道具的サポートネットワーク内の異性の割合が高かった。また、女性においては、伝統主義的な態度をもつ者 ( $M=31.87$ ) が平等主義的な態度を持つ者 ( $M=19.33$ ) より、道具的サポートネットワーク内の異性の割合が高かった。

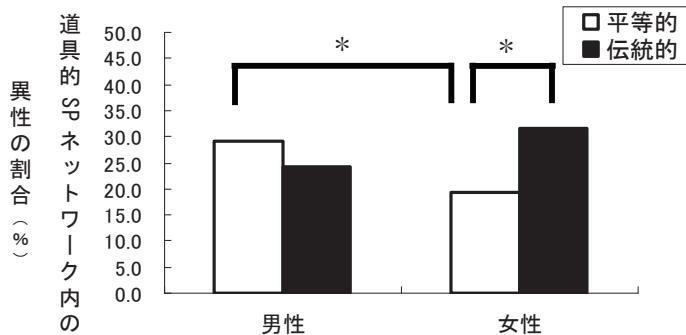


Figure 3 平等主義的態度×性別の交互作用

## 【考察】

本研究では、ソーシャル・サポートネットワークの多様性の指標の1つとして、ソーシャル・サポートネットワークにおける異性の割合に着目し、対人葛藤方略との関連に

ついて検討が行なわれた。その結果、道具的サポートネットワークにおいて異性の割合が高い者は、異性の割合が低い者よりも交渉によって両者が受け入れられる形で問題を解決する統合スタイルの対人葛藤方略を用いており、互いに譲り合うといった妥協スタイルの対人葛藤方略を用いることが少ないことが示唆された。このような結果は、情緒的サポートネットワークではなく、道具的サポートネットワークのみで得られた。したがって、本研究の仮説は支持された。

先行研究において、ソーシャル・サポート源の種類によって提供するサポートの種類が異なることが示唆されており (Campbell et al., 1986; Wellman & Wortley, 1989), 自分と異なる性別の友人や家族からのソーシャル・サポートは対人葛藤場面で有効に機能している可能性がある。

多くの場合、男性と女性は社会から異なる期待をされて成長する。男子は、達成、競争、独立を強調して育てられ、女性は暖かさ、親密感、表情の豊かさを強調して育てられる。このような男女の社会化の違いは、友人関係における経験にジェンダー差をもたらす。たとえば、友人関係においては、友人関係への期待 (和田, 1993), 友人との会話 (Caldwell & Peplau, 1982), 友人への攻撃行動 (Maccoby, 1998) などにジェンダー差が認められることが明らかになっている。このような経験に基づいた異性からのアドバイスは、対人葛藤が生じた原因や相手の立場や考えの受け入れ方について、自分自身では気づかなかった問題を投げかけたり、新たな解決方法を模索する契機となるのであろう。そのため、お互いにとって最もよい解決方法を探すという前向きな対人葛藤方略を用いることが可能となる。

しかし、対人葛藤場面におけるアドバイスの方法やその内容が男女で異なるために、異性からのアドバイスの有効性は対人葛藤の種類によって異なる可能性がある。今後は、対人葛藤の種類や性別の要因も考慮したうえで、異性からのアドバイスがより有効な対人葛藤方略の選択へとつながるプロセスについて検討する必要がある。また本研究で得られた結果については、異質性の許容度の違いを反映しているという代替説明も可能である。対人葛藤場面で自分と他者の意見や立場を統合し、建設的な解決方法を導くためには、まず他者の意見や立場を理解することが必要となる。このような自分とは異なる考えや立場の許容とソーシャル・サポートネットワークにおける異性の割合の高さとの関連には、異質なものを受容するという共通の心理的プロセスが推測される。今後は、個人が持つ異質性の許容度という要因も含めた検討が必要であらう。

次に、本研究では対人葛藤方略の選択において、道具的サポートネットワークの多様性の効果のみが認められ、情緒的サポートネットワークの効果は認められなかった。本研究で検討された道具的サポートが「個人的な問題や、人間関係、所属する集団における社会的な問題などに対処するために、必要な情報や知識を与えてくれる」といった内容であったことをふまえると、妥当な結果である。しかし、山下・坂田 (2008) は対人



関係における問題の1つである恋愛関係崩壊について検討を行ない、情緒的サポート源の多様性が恋愛関係崩壊からの立ち直りにポジティブな影響を及ぼすことを明らかにしている。これらの知見の違いについて、対人葛藤場面と恋愛関係崩壊場面を比較すると、対人葛藤はこれから修復が可能な傷つきの少ない場面であったことが考えられる。対人葛藤の深刻さを考慮した研究を行なえば、情緒的サポートネットワークの多様性の効果が得られる可能性は高いと考える。

さらに、ソーシャル・サポートネットワークにおける異性の割合と平等的性役割態度との関連についても、探索的に検討された。その結果、平等主義的な態度をもつ男性が平等主義的な態度をもつ女性より、情緒的サポートネットワーク内の異性の割合が高かった。また、伝統主義的な態度をもつ女性が平等主義的な態度を持つ女性より、ソーシャル・サポートネットワーク内の異性の割合が高かった。これは、男女は異なる役割を担うべきだという態度を持つ女性の方が、男性を重要なサポート源として自らのネットワークに受け入れているということを示している。「男性は強く、独立的で、女性は弱く、依存的である」という伝統的な性役割態度を内在化している女性にとっては、女性は他者への依存が許されると意識しやすくと考えられ、多くの異性のソーシャル・サポート源を持つことに抵抗がないと考えられる。一方、男性は平等主義的性役割態度によってソーシャル・サポートネットワークの異性の割合に違いが認められなかった。自らがどのような態度を持っているかという個人的態度より、「強く自立的であるべきだ」という社会的期待の影響力が強く、その期待に沿う範囲でソーシャル・サポートネットワークを構築するよう動機づけられている可能性がある。

最後に、本研究の限界と今後の展望について述べる。本研究では、ソーシャル・サポートネットワークの多様性の指標として、異性の割合しか扱うことができなかった。対人葛藤場面で効果的なソーシャル・サポートネットワークの多様性を検討するには、年齢、所属、役割といった他の要因を考慮することも重要であると考えられる。今後は、これらの要因を考慮したソーシャル・サポートネットワークの検討が必要であろう。この限界と関連して、データ数の問題によって異性の友人、異性の家族、異性のその他の関係（先輩/後輩、アルバイト先の人物など）というように、関係に基づいた分類を行なうことができなかった。そのため、対人葛藤方略とソーシャル・サポートネットワークの異性割合との関連を示す結果には、ソーシャル・サポートネットワークにおける異性という「性別」の効果と異なる「関係」の効果が混在している。平等主義的性役割態度との関連が認められたことから、異性という性別との関連が関係との関連より強いことは予測されるが、今後は関係を統制した検討が必要であると考えられる。

#### 【引用文献】

Blazer, D.G. 1982 Social support and mortality in an elderly community population. *American*

- Journal of Epidemiology*, 115, 684-694.
- Burda, P.C., Jr., Vaux, A., & Schill, T. 1984 Social support resources: Variation across sex and sex role. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 10, 119-126.
- Caldwell, M.A. & Peplau, L.A. 1982 Sex Differences in same-sex friendship. *Sex Roles*, 8, 721-732.
- Campbell, K.E., Marsden, P.V., & Hurlbert, J.S. 1986 Social resources and socioeconomic status. *Social Networks*, 8, 97-117.
- Canary, D.J., Cupach, W.R., & Messman, S.J. 1995 *Relationship Conflict*. Sage.
- Cohen, S., & Wills, T. A. 1985 Stress, social support, and the buffering hypothesis. *Psychological Bulletin*, 98, 310-357.
- 原口雅浩・小関友佳子・津田彰 1992 大学生の心理的ストレス過程—ストレッサーに対する認知的評価とコーピングおよびストレス反応 九州大学教養部心理学研究報告, 10, 1-16.
- 橋本剛 2005 対人関係に支えられる 和田実(編) 男と女の対人心理学, 北大路書房, pp.137-158.
- Holmes, T.H. & Rahe, R.H. 1967 The Social readjustment rating scale. *Journal of psychosomatic Research*, 11,213-218.
- 柏尾眞津子 2005 友だちになる 和田実(編) 男と女の対人心理学 北大路書房 pp.39-40.
- 加藤司 2003 大学生の対人葛藤方略スタイルとパーソナリティ, 精神的健康との関連について 社会心理学研究, 18, 78-88.
- Kelly, H.H. 1987 Toward a taxonomy of interpersonal conflict process. In O.Stuart & S.Spacapan (Eds.), *Interpersonal process* (pp.122-147). New York:sage.
- Maccoby, E.E. 1998 *The two sexes: Growing up apart, coming together*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- 南隆男・稲葉昭英・浦光博 1988 「ソーシャル・サポート」研究の活性化に向けて—若干の資料 哲学, 85, 151-181.
- Salazar, L.F., Wingood, G.M., DiClemente, R. J., Lang, D.L. and Harrington, K. 2004 The role of social support in the psychological well-being of African American adolescent girls who experience dating violence. *Violence & Victims*, 19, 171-187.
- Seeman, T.E., & Syme, S.L. 1987 Social networks and coronary artery disease: a comparison of the structure and function of social relations as predictors of disease. *Psychosomatic Medicine*, 49, 341-354.
- 嶋信宏 1992 大学生におけるソーシャル・サポートの日常生活ストレスに関する効果 社会心理学研究, 7, 45-53.
- Shumaker, S.A., & Brownell, A. 1984 Toward a theory of social support: Closing conceptual gaps. *Journal of Social Issues*, 40, 11-36.
- Sullivan, H.S. 1953 *The interpersonal theory of psychiatry*. New York: Norton. 中井久夫・山口隆(訳) 1976 現代精神医学の概念 みすず書房
- 鈴木淳子 1994 平等主義的性役割態度スケール短縮版 (SESRA-S) の作成 心理学研究, 65, 34-41.

- 浦光博 1992 支えあう人と人 サイエンス社 Pp.21-45.
- 和田実 1992 大学新入生の心理的要因に及ぼすソーシャルサポートの影響 教育心理学研究, 40, 386-393.
- 和田実 1993 同性友人関係—その性および性別タイプによる差異 社会心理学研究, 8, 67-75.
- 和田実 2002 恋愛と性行動 和田 実・諸井克英 青年心理学への誘い—漂流する若者たち ナカニシヤ出版 Pp.87-106.
- Wellman, B., Wortley, S. 1989 Brothers' keepers: situating kinship relations in broader networks of social support. *Sociological Perspectives*, 32, 273-306.
- 山下倫実・坂田桐子 2008 大学生におけるソーシャル・サポートと恋愛関係崩壊からの立ち直りとの関連 教育心理学研究, 56, 57-71.

APPENDIX：対人葛藤方略尺度（加藤，2003；全20項目）

---

**統合スタイル**

最良の結果が得られるように、お互いの考えを理解する  
 お互いに満足するような結論を見つけ出そうとする  
 お互いの目的を支持する  
 お互いの利益になるような決定をする

**回避スタイル**

対立を防ごうとする  
 できる限り口論にならないようにする  
 相手との衝突を避けようとする  
 お互いの意見の相違に直面しないようにする

**強制スタイル**

自分の意見を通そうとする  
 自分の立場を押し通そうとする  
 自分にとって有利な結果を得ようとする  
 自分の意見を通すために、いろんなことをする

**譲歩スタイル**

友人の要求に従う  
 友人の望みどおりにする  
 友人の目的に沿うようにする  
 友人の考えを認める

**妥協スタイル**

お互いの意見の間を取ろうとする  
 お互いの意見を水に流すよう主張する  
 お互いの意見の歩み寄ったところで、取り決めようとする  
 お互いの妥協点を探そうとする

---